

『羊の歌』の翻訳メモから

翁 家慧

私は『羊の歌』（正・続）を中国語に翻訳しながら、不思議に思ったことがある。あれほど多くの人物が書かれているが、同じ口調で語られたものがひとりもない。派手やら、神秘やら、滑稽やら、愚かやら、卑怯やら、千差万別な語り方によって語られた人物像がじつに万華鏡のように変化に富んでいた。読者にとって、それこそ読み応えがあるところではなかろうかと思うが、翻訳者にとって、これこそ、取り扱いにくい、厄介なものである。苦労した箇所はたくさんあったが、最初に頭に思い浮かんできたのは、一個の主語の翻訳であった。

「渋谷金王町」の書き出しにあたる一文の主語は「埼玉県の地主の次男」で、「私の父」ではなかった。語り手が、3ページも使って、自分の父親の事について、揶揄半分の口調で語っていたが、「第一次大戦の終わった後、私はその家で生れ、その家で育った」まで、一向に「父」という呼称を使わなかった。ここは、日本人の読者にとって、たぶん主語がなくてもわかるような箇所であろうが、「私の父」（我父親）と訳さないと、中国人の読者にはとても理解できないところであった。英語版を参考したら、やはり「my father」に訳されていた。中国語版も「私の父」（我父親）と訳したほうがいいのか、と私は迷っていた。いろいろと悩んだ結果、原文の語り手に従い、第一人称の「私の父」（我父親）に訳さず、第三人称の「彼」をつけくわえ、訳したのであった。

なぜかというと、私はそこから一種の客観的な事実を強調する語り手の配慮が読み取れたからだ。すなわち、「私」が生まれた時点から、「埼

玉島の地主の次男」が本格的に「私の父」になったという事実がはじめて確認されたのであった。そして、読者にとって、その時点で、語り手と作中の「加藤周一」とがはじめて重なってきたわけなのである。言い換えれば、あえて「私の父」という呼称を使わなかったのは「加藤周一」ではなく、語り手なのであった。自伝的小説では、第一人称の語り手が持つトリックみたいなものがある。語る自己と語られる自己とのあいだにおく距離を調整することによって、文脈と文体を自在に作り上げることになる。

しかし、なぜ、加藤は第一人称の「私の父」を使わず、第三人称の「埼玉県の地主の次男」のような冷静沈着な語り方を使っていたのか。彼が、「祖父の家」では、書き出しの文の主語にも、「埼玉県の地主の次男」と似たような書き方で「佐賀の資産家のひとり息子」という言い方を使っていた。しかしながら、次の文にくると、「それが私の祖父である」と書いて、直ちに親族関係を表明するような語り方にしている。

『羊の歌』（正・続）の構成には或る種のハイパーテキストのような特性があると私は理解している。それは、一見、章と章がそれぞれ独立しているようにみえるが、実際のところ、時系列に繋がっていて、内容においても、相互補完という形で構成されている。たとえば、加藤は「内科教室」に次のような示唆的文句を書いていた。

医者の世界は、珍しいものではなかった。私は子供のころから、白衣や、薬の棚、消毒液の匂いや聴診器の冷い肌触りに慣れていた。しかしそれだけではない。確かな事実にもとづいて結論できることだけを結論し、検証することのできないすべての判断を疑う——というものの考え方そのものが、私にとって新しいものではなかった。

加藤は、医者である父親から、「実証主義」というものの考え方を学ん

だったのであった。言うまでもなく、この「確かな事実」を検証して、はじめて結論を出すという考え方は加藤に大きな影響を与えたのである。補足説明として取り上げるが、『『羊の歌』余聞』では、加藤が「私はずいぶん早くから父を尊敬していましたね。とにかく金儲けするなら患者をだましたほうが簡単なんですから。彼は自分自身に対しても、他人に対しても、非常に正直だったんです。信じることを言う。そして曲げない。その影響もあると思いますよ。」と語っていた。

実証主義者である父親のことを語る時に、加藤が取った実証的な語り方は、父親の人柄に因んだものではないかと私は考えた。当然ながら、この実証的な語り方に潜む別のニュアンスは読者の理解によって違うものになるだろう。それを保つのは、翻訳者の仕事であるが、それを明かすのは、到底、翻訳者の力で及ばないことであろう。

(おう かけい 北京大学東方文学研究中心副教授)

